

## 秋の夜長に勧めたいこの二作 ～書評&映画評～

「カラフル」森絵都

目の覚めるような黄色い表紙を開くと、天使がこう微笑みかける―「おめでとうございます、抽選に当たりました！」

森絵都著「カラフル」は私が中学生の時に衝撃を受けた一冊だ。この本が今年文庫化されたのを知り、懐かしい気持ちでいっぱいになった。そして気づいたら買っていた。

この物語の主人公は死んだ魂「ぼく」である。生前に罪を犯したため輪廻のサイクルから外されてしまったが、天上界の抽選に当た

り再挑戦することになる。自殺を図った少年「小林真」の体にホームステイし、自分の罪を思い出せば合格。天使「プラプラ」のガイドのもとで過ごすうち、人間のもさまざまな一面を見出していく「ぼく」―次々と明らかになる事実。「ぼく」の再挑戦の行方は？

この作品は中高生向けに書かれているため、大学生に紹介してもいいものか正直迷った。しかし、彼女の作品に組み込まれている「人間の心の深い部分」にはいつ読んでも共感できるはずだ。移り変わる心の様々な表情を巧みに描き出す、それが森絵都の作品の特徴でもある。

生きていると自分というものが分からなくなってしまう。でもそれは何も特別なことではなくて誰もが感じていることなのだ。そんな当たり前のことを改めて気づかせてくれる。何かに行き詰まったら是非読んで欲しい一冊だ。

(山下)



「ポビーとディンガン」原作：ベン・ライス

まず初めに言っておきたいことがある。この映画はどんな「映画」にも属さない。ラブストーリー、アクション、コメディと様々なジャンルが映画にはあるが、どれに当てはめることもできない。もしも世の中に「幻」という映画のジャンルがあるのならこの映画はそれに相当すると私は思う。

殺風景な町に住む両親、兄のアシモル、妹のケリーアン。平和な家族だが妹の友達であるポビーと

ディンガンがただ一つの問題であった。なぜなら彼らは妹にしか見えない空想上の友達、イマジナリーフレンドだから。誰からも信じてもらえない妹であったが、アシモルだけは妹を信じた。突然いなくなってしまう自分には決して見えない友達を探しに町を走りまわる妹のために。そのけなげさは誰の目にも涙を浮かべさせるだろう。実際私も泣いた。

そして映画の終盤シーン。どう終結するのかと様々な想像をめぐらせていたが、良い意味で裏切られた。まったく予想に反した結末に驚くとともに、ほのか



今回私たちは芸術の秋といふことで、7月21日～10月1日に東京都現代美術館で行われていた「ジブリの絵職人 男鹿和雄展」にお邪魔した。美術館にはスタジオジブリでの作品はもちろん、アニメや映画以外の絵も展示されていた。

中に入るとまず目に付くのが、男鹿氏がジブリに携わる前に手掛けた作品だ。30～40代の人なら思わず興奮してしまうような懐かしいアニメ：なのかもしれないが、あにく私たちが「はだしのゲン」「あしたのジョー2」くらいしか知らず、後は名前を知っている程度、もしくは聞いた事すらないものばかりだった。しかしだからこそ先入観を持たず、純粋に作品を見ら



「となりのトトロ」背景画 (1988年) (c) 1988 二馬力・G

れたと思う。多くの作品の中でも「カミイの剣」の寂れた寺の絵は、青白い月の光と夜の暗闇が静けさを醸し出し、「妖獣都市」での教会のマリア像の絵はその繊細さと、霧と光が織りなすどこか妖しげで荘厳な雰囲気印象的だった。

「妖獣都市」の作品を抜けると、そこにはスタジオジブリ作品の絵がある。「となりのトトロ」はもちろん、「魔女の宅急便」「ハウルの動く城」など、彼の手がけた作品が展示されていた。中でも目を引いたのが「おもひでぽろぽろ」である。なんとも言えない郷愁感が漂う作品ばかりで、田舎というものをあまり知らない人でもそのイメージが容易に湧くぐらいい事に描き出

されていた。スタジオジブリ作品の奥には映画やアニメといった映像の世界ではなく、絵本や挿し絵、本の表紙などで男鹿氏が描いた作品が並んでいた。ここでの作品は、どれもこれまでの背景画とは雰囲気違った。背景画は本来セル画と組み合わせられて初めて一つの作品になる。しかしここの絵はそれ自体が作品として完成している。女優吉永小百合さんが手がける原爆を題材にした「第二楽章」では、穏やかな風景と悲愴な過去を見事に描き分けていて、平和であることの大切さがよく伝わってきた。原爆ドームと川を流れる灯籠の絵には、悲しさを感じずにはいられなかった。

## ジブリの絵職人 男鹿和雄展

男鹿氏の作品以外にも楽しいコーナーがたくさんあった。背景画やアニメーションの技法などを紹介するコーナー、大きなトトロの人形と一緒に写真撮影ができるフォトロケーション、「折紙でトトロをつくろう！」のコーナーやミニシアターなど、非常に充実していた。普通とは一味違った展覧会だった。

(杉村)

## 坂登っちゃいました ～秋の味覚を求めて～

お腹が空くこの季節。食欲の秋にちなんだ秋の甘味を探しに神楽坂を歩いてみた。

飯田橋駅から降りて神楽坂校舎の方へと歩いていった。すると甘い匂いが私たちを引き止めた。それが不二家飯田橋神楽坂店である。この店限定のベコちゃん焼きには定番の味の他に季節限定と月替わりの味もある。今年の秋限定品は渋皮マロンクリーム、月替わり品はハロウィンを意識したパンプキンである。

渋皮マロンクリームは一口食べると、とろとろのクリームが溢れ出し、ほのかに香る栗の風味は食べ終えたあと口の中に残る。白あんがベースのパンプキンは温かいうちに食べるのがオススメ。一口食べたときに顔を出すあんは、しつこくない甘さで、つついもう1個食べたくなってしま

う。ちなみにベコちゃん焼きだけでなく、ポコちゃん焼きというものも存在する。

彼に出会える確率は算出不可能であり、手にすることは難しい。ポコちゃんの裏側には、なんと「かぐら坂ぼこちゃん」と書かれている！この事実を確かめにもしくは月替わりの味を求めて神楽坂店に足を運ぶのも良い。今ならハロウィン仕様でいつも以上にキュートなベコちゃんに会える。毘沙門天を曲がると、そこにはフランスの雰囲気漂う料理屋がある。その店の名前はルブルターニユ。ここの今月の限定メニュー「洋梨のコンポート、スパイス風キヤラメルを加えたもの。温かいクレープ生地とオリジナルの冷たいアイス、スパイスの冷たいアイス、スパイスの冷たいアイスが非常にマッチした一品であった。

さらに神楽坂を上がって行くと、パンやコロッケの美味しい匂いが私たちを誘ってきた。それらを通り過ぎていくと、和の趣を感じさせるお店があった。それが梅花亭である。そこでは季節限定の和菓子に出会った。それらの中で9月初旬～12月初旬の限定商品、栗蒸し羊羹を紹介しよう。砂糖蜜が中ま



▲熱いお茶に合う栗羊かん



▲不二家神楽坂店限定ベコちゃん焼き

## 合宿幹事の皆様へ

### 新聞会夏合宿レポート

9月中旬、去年に引き続き私たち新聞会は諏訪東京理科大にて夏休み恒例の合宿を行った。そこで、2泊3日の合宿を費用の面で振り返った。これから合宿を計画している団体の参考にあれば幸いである。

今年の参加者は総勢33名、もはやレンタカーで運ぶには運転手が足りない！電車や路線バスも考えたが結局貸し切りバスを利用することにした。今回借りた大型バス(45人乗り)は乗



人以下の団体ならばマイクロバスを使えば交通費も1日3、4万円程度で済む。そうはいっても合宿は安全で楽しいのが第一。事故のないように計画し、事前に確認しておくことをお勧めしたい。

(加藤)